

「ちいちゃんのかげおくりに込めた平和への願い」

- 1 授業に至るまでの経緯
- 2 ちいちゃんのかげおくりの授業
- 3 変わりはじめた子どもたちのようす
- 4 成果と課題

今次教研で論じられた内容と今後の課題

沖縄大学の吉井美知子さんと三重県教育委員会人権教育課の森嶋克幸さんを助言者に迎え、以下の 2 本の柱にそって討議を深めた。

(1) 学校行事や授業を通じた平和学習のとりくみ

桑名支部の水谷宗弘さん（小学校）の「平和を創り出す教育をどのように進めるか」という報告は、小学 2 年生の子たちに「へいわってすてきだね」「かわいそうなぞう」「わたしのせいじゃない」など絵本を読み聞かせ、「自分にも平和のためにこんなことができそうだ、こんなことをやってみたい」と主体的に考える子どもたちを育てたいという実践であった。

三河支部の吉田明史さん（中学校）から「今と未来の平和をとらう流しから考える」という報告がされた。広島原爆の威力・被害について学び、平和について考え、中学生の子どもたちとともに「とらう」を制作し、8 月 6 日の広島「とらう流し」に参加していく実践である。吉田さん自身が、広島の大学時代から、被爆者の体験の聴きとりと、「とらう流し」に 10 年以上参加してきたことにもとづいている実践である。

伊賀支部の山岡朱さん（中学校）の『記憶』を語り継ぐ平和学習」という報告は、中学 2 年・3 年の 2 年間かけての実践。被爆体験者との出会い、平和についての作文、東京での修学旅行で感じたこと、山岡さん自身も若い社会科教員として、平和とどう向きあい、歴史をどう教えていくのかを考えながらの実践であった。「平和を大切にするには、人を尊敬することが大事です。」という感想をもった子もいた。「差別する・戦争するの反対ことばは『尊重する』』と言われた研究者・上杉聰さんの考えにもつうじることばが中学生から出てきていることに感心させられた。

松阪支部の脇野昭典さん（小学校）の「ちいちゃんのかげおくりに込めた平和への願い」という報告は 3 年生の国語教材での実践。国語学習に関連させて、東京大空襲や沖縄戦を体験された方の映像も視聴させた。教科書だけでなく「ちいちゃんのかげおくり」の絵本の挿絵も活用して、深く読みとらせ、考えさせようとした実践である。

亀山支部の田川倭さん（小学校）の「平和学習にかける思い」という報告は、DVD 教材「ウミガメと少年」を用いて、夏休みの登校日に戦争の悲惨さについて 4 年生の子どもたちに考えさせた実践。戦争があった事実だけに関心を寄せるのではなく、当時の人の思いを考えさせようとした。学校全体で、系統的に平和学習をすすめる重要性について提案された。

助言者から『白旗の少女』『ウミガメと少年』どちらも沖縄の子たちの話である。本土の子たちの戦争中の悲劇と同列に並べられることはどうなのだろうか」という問いかけがなされた。考えていきたい問題である。

(2) 地域教材をいかした平和教育のとりくみ

度会支部の阪口文博さん（中学校）の「つながりを意識した平和教育」という報告は、中学 1 年生の子たちが、夏休みの登校日に戦争体験を聴いて書いた感想と、さまざまな戦争に関するニュース、家庭での対話などをつなげることで、日常的に主体的に考えさせ、問題意識をもたせようとした実践。平和教育とは、戦争をしないという政治的な選択をする主権者教育でも

あるということも話しあわれた。

名張支部の北崎良さん（小学校）の「行動化できる平和教育を」という報告は、6年生の子どもたちと、戦争中、広島で看護師をされていた方の「生の声」を聴き、過去の日本と未来の日本と、これから自分たちが平和を守るためにできることを考えさせようとした実践。

志摩支部の中村楓さん（中学校）の「青い目の人形を教材として」という報告がされた。三重県に9体しか残っていない人形のうち一体が志摩市の学校にある。この事実を地元の先生たちに詳しく知ってもらい、青い目の人形と、それに関わった人たちの思いを子どもたちに伝えていきたいと、青年部で学習会を開き、中学1年の「道徳」の授業での実践を構想された。

伊勢支部の辻理子さん（小学校）の「平和教育を語り継ぐために、共同体を広げるには」という報告は、ご自身の御尊父の戦争体験を手作りの紙芝居にまとめられ、小学2年生の子どもたちに伝えていこうとした実践。多くの自衛隊関係者が保護者であるという地域で、困難な状況のなか「語りついでいきたい」という熱い思いの何年にもわたる実践である。

成果と今後の課題

次の2つのことを意識した「主権者」を育てたいということが話しあわれた。一つめは、原爆など戦争で日本が被害を受けたことを学ぶとともに、アジア諸国に、その何十倍もの被害と犠牲を与えていることも忘れないようにしたい。「被害者意識」だけでなく、そういう「加害者」意識をもって、諸外国の人たちと接していける主権者を育てたい。二つめは、憲法9条がいつのまにか変えられてしまうということにならないようにしたい。そのためには、何も、みんながデモやストライキをしたりしようということではない、選挙へ行って主体的に考え投票する主権者になろうということである。

助言者から「原発をとめたのはフランスでもお母ちゃんたちだった」という報告があった。「58基も原発のあるフランスでほとんど唯一、原発のない地域がブルターニュ半島。ここでも原発を建設する動きは1980年代にあった。それをくいとめたのは母親たちを中心とする反対運動であった。紀伊半島でも、漁師のおかみさんたちが反対運動をしたことが原発をくいとめる大きな力となった」原子力発電所を維持することは核兵器を作る能力を維持することにつながっているとされている。だからこそ、原子力の問題を平和教育分科会であつかう必要があるということを確認された。原発の問題を取りあげ、実践していくことも忘れてはならない課題である。

主たるテーマ 「戦争・平和をどう子どもたちに伝えていくか」

<全クラスの国語を受けもった昨年度>

3年生の『国語専科』という聞きなれないポジションが今年のわたしの担当だった。自分でも授業づくりには力を入れてきたここ数年だったが、学校の諸事情（主に学力向上へのとりくみ）があり、このような特異な担当になったことを活かしての実践を報告したいと思う。

<教科書のちいちゃんのかげおくりにもった違和感>

ちいちゃんのかげおくりという絵本は自分でも所持しているし、戦争平和について国語科で最も早く学ぶ物語作品であるという認識をもっていった。ちいちゃんの家族が戦争によって引き裂かれ、最期にはちいちゃん自身も戦争によって命を失ってしまう悲しく切ない物語。

ただこの作品のラストシーンは空の上で家族と再会するという場面があることから、「ちいちゃんは家族に会えてよかった」「みんなに会えてうれしかった」という感想を子どもたちはもちがちなのである。

命を失う事なのに「よかった」「うれしかった」という意見を子どもたちがもってしまうことにわたし自身かなり違和感をもっていったが、なぜそうになってしまうのか…それは原作の絵本を持っている自分には不思議でならなかったのであるが、教科書を見てなぜそうしてしまうのかの原因が分かったような気がした。

<キーとなる挿絵がさほど載っていない>

あらためて教科書のちいちゃんを読み返してみても気づいたのは挿絵の少なさである。一通り通読してみて挿絵の数を確認すると合計で9枚。絵本には25枚の挿絵がある。絵本に描いてある挿絵は、作者であるあまんきみこさんが上野紀子さんに依頼したものであり、そのなかには物語の場面をイメージするために込められた想いのつまったものであるが、その半分以下しか教科書には載っていない。

光村図書に挿絵のことを聞いてみると「載せられる枚数が決まっている」とのこと、特に厳選してというわけではないとのことだった。挿絵の枚数に制限があるので、編集側が選んだ任意の挿絵にしか教科書では触れることができない。特にちいちゃんの命が空に消える場面では、ちいちゃんがきらきら駆け出していく挿絵が載っているの、その後の焼野原でちいちゃんがうつぶせで亡くなっている挿絵が無く、4場面の挿絵だけで見れば「家族に会えてよかった」に子どもたちが思ってしまうのも納得がいく。

しかし…、戦争で奪われた命のことやあまんきみこさんの作品に込めた想いを考慮すると、ハッピーエンドで終わらせてはいけない。

<事前指導として>

ちいちゃんのかげおくりの学習に入る前に、戦争のことについて教えておく必要があると考えた。手段はさまざまあると思うが、ちいちゃんの世界観で最も酷似していると思った歴史的な事象は東京大空襲が頭に浮かんだ。そこで9歳のときに東京大空襲を経験した方の体験談を語っている動画を子どもたちに見せた。

空襲当夜母親ととにかく無我夢中で逃げた経験や、荒川土手に死体が山ほどあった事。水を求めてたくさんの人が川の方へ逃げたことなど、ちいちゃんのお話に出てくる場面に酷似していた。

そして、話が終わった後に、桑名市が空襲を受け、焼け野原になった写真を見せた。東京だけではなく、三重県にも空襲があった写真を見せることでこの地域も戦争があったことを知らせた。

二つめに見せたのは機銃掃射の「ガンカメラ」映像である。山室山小学校で登下校の見守りをしている「お助け隊」の方の一人に機銃掃射から逃げた経験をもつ方が居て、その事についての経験が数年前に新聞記事になった。今もその記事は学校に残っており、校区にあった戦争の記憶であると考えて子どもたちに紹介することにした。ガンカメラ自体は無音で録画されるが、後から音声を付けた映像を紹介したので、その音の迫力が更に機銃掃射の恐ろしさを醸し出していた。その映像を見せた後に、亀山列車銃撃事件の映像も見せた。これも、県内であった戦争の記憶だったからだ。

三つめには沖縄地上戦を生き抜いた戦争体験者の映像を見せた。戦後 70 年の記念につくられた番組で、若い女優さんが沖縄戦を経験されたその方にお話を聞くというものであり、“わたしに戦争を教えてください”というテーマで構成されているドキュメンタリーである。

その経験者の方は7歳のときに沖縄地上戦を経験し、戦争を生き抜くなかで家族と離れ離れになった。そのさなか、“がま”（防空壕）の中で会った老夫婦に「命どう宝」という教えと、ふんどしで作られた白旗を掲げ、戦地を生き抜いた少女である。『白旗を掲げた少女』という題名で教科書にも掲載された。

空襲の後ひとりぼっちになったちいちゃんと地上戦のさなかにひとりぼっちになった経験談に重なる部分があるのではないかという考えと、地獄と比喻されるような戦地を生き抜いて語られる経験者の方の言葉、特に「命どう宝」という考えをちいちゃんのかげおくりの学習に入る前に子どもたちに伝えようと考え、この映像を紹介した。

そして、最後に5年前に平和集会で某人気グループがかつて歌った曲に合わせて自作した戦争と平和を対比した映像を紹介した。戦争と平和の対比をすることで、平和の尊さを知ってほしかったからである。

指導者としてちいちゃんのかげおくりの学習よりもこの事前学習の方が力を入れすぎているような気はしたが、年間を通じて直接的に戦争のことを伝えるチャンスはあまりなかったので、「ここしかない！」という思いで子どもたちに戦争と平和のことを伝えた。

<ちいちゃんのかげおくりの授業>

事前指導でやれるだけのことはやったと考えて授業に入ってみたものの、子どもたちの反応は決して良好なものとは言えなかった。長期休み明けという事や、子ども一人ひとりの諸事情もあったのかもしれないけれど、やはり「戦争」というものに対してどう向きあえばいいのかは3年生にとってむずかしいものだ。

おそらく子どものなかで何を言えばいいのか、言ってもいいのかという葛藤もあったのかもしれない。また、自分自身も「命」の尊さを知ってほしい、「戦争」の残酷さを知ってほしいという思いが強かったのでそういう思いがにじみ出ていて子どもも答えにくい面があったと思う。

そこで挿絵を元に作成したワークシートを使って学習をすすめることにした。授業に入る前から試案していたもので、上野紀子さんの挿絵をすべて子どもたちに見せようと思い、教科書に載っているもの以外の挿絵もワークシートには載せてみた。文章だけではわかりづらい登場人物のようすやちいちゃんが焼け跡でたたくむようすなど、挿絵からわかることがかなり多く、読みの深い子も周りが話しはじめると重い雰囲気から解放され物語の核心にせまる考えを出せるようになってきた。場面がすすむにつれ徐々にちいちゃんのお話の流れをイメージできるようになってきたところで、問題の4場面（ちいちゃんの命が空に消える場面である）に入った。自分はここで一つだけある仕掛けを作った。それは「夏のはじめのある朝、こうして、小さな女の子の命が、空に消えました。」という文章の挿絵だけ、ワークシートから省き文字だけ載せたのである。

<空に消えたちいちゃんの命>

この仕掛けについて、実際に授業での子どもとのやり取りを中心に書きたいと思う。

※ ◎は授業者 子どもはアルファベットで表記

ー授業のようすー

<ちいちゃんのように、これまでのかげおくりと違うことを押さえた上で>

◎…ちいちゃんのかげおくりしてお花畑の上に立っていたんだけど、どうなったの？

A…お父さんたちに会えた。

B…家族はみんな天国（空の上）にいた。

C…みんな天国（空の上）にいたからちいちゃんに会いにこれなかった。

D…空に吸い込まれたってことは多分死んだんじゃないかな。

A…空の上でみんなに会えた。

E…ちいちゃんはきらきら笑い出したから嬉しかったと思う。

B…みんなに会えてよかった。ひとりぼっちじゃなくて嬉しい。

◎…そうか。じゃあみんなに会えてちいちゃんはほんとうに幸せだったのかな？

ー少し間があってー

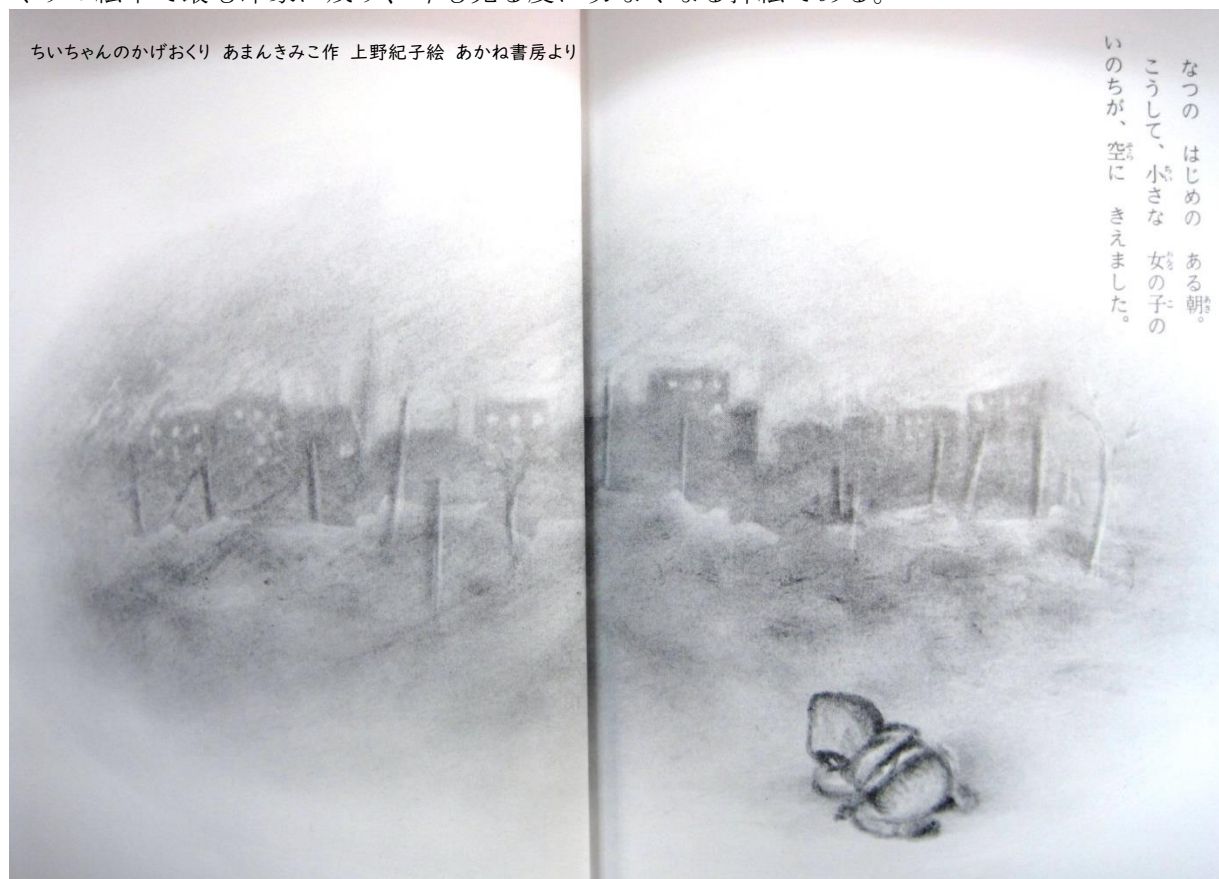
F…きっと幸せだったと思う。ひとりだとさみしいから

G…みんなが来てくれることを待っていたから嬉しかったと思う。

H…フラフラして立つのもやっとだったのに走り出せるほど元気が出たからよかった。

I…やっぱりみんなといっしょの方が嬉しいと思う。

と、このようなやり取りがつづいた。概ね「みんなに会えてよかった」という雰囲気が授業の中で浸透しはじめ、多くの子どもたちの思考もよかったという流れになっていったので、わたしは省いていた下の挿絵（拡大したもの）を黒板に貼った。わたし自身、ちいちゃんのかげおくりの絵本で最も印象に残り、今も見ると切なくなる挿絵である。



◎…なあ、みんなこの挿絵見てどう思う？

—長い沈黙があった—

…先生、そのうずくまってるのちいちゃん？

◎…うん。そう

A…なんか…かわいそう

J…教科書の絵となんかちがう…

◎…そうなん。教科書には載ってないけど、絵本には載っているの。この短い文章の絵が。

—再び沈黙—

◎…ちょっと近くの人とこの挿絵みて「ちいちゃんは幸せ」だったか話しあってみてくれへん？

沈黙が長くつづいたのはおそらく予想だにしていなかったショックだったと思う。故にグループでの話しあい活動で少し周りの印象と比べて考えを明確にさせようと手をうってみた。

◎…そろそろいいかな。じゃあ話しあったこと、聞かせて。

B…ちいちゃんはさ、天国では幸せになったと思う。

C…天国では幸せやけど、地上では幸せになれなかったんとかちがうかなあ…。

◎…それ、なんでそう思うん？

C…だって、一人で伏せてさ…家とか焼けてる寂しいなかでさ…

B…わたしもそう思う。天国でしか幸せじゃない。

A…天国では家族が居るのに、地上ではひとりぼっちやし。

◎…地上では幸せじゃないのはどうしてなん？

A…みんなおらんし…。

D…うん、戦争でみんな死んでしまったし、家もなくなったし。

◎…じゃあ、この場面で戦争はちいちゃんから何を奪ったんだろう？

みんな…命！ちいちゃんの命！

この後、授業の主役は子どもたちであるにもかかわらず、わたしは語ってしまった。戦争があったからちいちゃんは死ななければならなかった事、戦争が家族を引き裂いたこと、そして実際にたくさんのちいちゃんのような子どもたちがいた事。授業者として子どもたちの考えや思いをもっと引き出し平和への思いをふくらませるべきだったが、ここまで話のなかに踏みこんで話しあいができる子どもたちの純粹さやまっすぐな姿勢に感動し、語らずにはいられなかった。

<ある女優の読み聞かせ>

もう一つ、この実践をするのに使ったのは今年亡くなったある女優の「ちいちゃんのかげおくり」の朗読だった。その女優が亡くなったのは今年の1月12日。実はちいちゃんのかげおくりは本来10月上旬からの単元だったが、わたしが校内の研究授業を11月に全体提案する都合で「モチモチの木」と「ちいちゃんのかげおくり」を入れ替えて指導していた。そのため、ちいちゃんのかげおくりを指導したのは1月下旬からだった。わたし自身、その女優については「昔話の名作アニメ」の語り手とか、サスペンスドラマの家政婦役であることは知っていたし、絵本の朗読をされていることは知っていたが、ちいちゃんのかげおくりに想い入れがあることについては正直知らなかった。

2月8日CBCテレビのとある番組でその女優が「ちいちゃんのかげおくり」を朗読していたのをたまたま見ていた妻が何かに使えると察して番組を録画してくれていた。それを後日観て、「これって子どもたちに見せたらいいかもしれないなあ…。」と思ったのだが、子どもたち自身がこの教材にノッてくる前だったので自分のなかで迷いがあった。

学習がすすむにつれ、子どもたちも「ちいちゃんのかげおくり」の世界にぐんぐん入って考えられるようになって来たときに、一人の子がその番組のことと、ちいちゃんのかげおくりの朗読について日記を書いたという話を担任の先生から聞いた。かなり長い日記を書いたとのことだった。

やっぱり子どもの心に訴える何かがあるんだろうなと思い、学習のまとめとしてこの朗読について子どもたちに紹介することにした。だが、“どうやって見せるか”ということにむずかしさを感じた。その女優が朗読をしている姿を見せるとなると、教科書の挿絵（上野紀子さんが書いた）は別のものになってしまうことはもったいないような気がしたので、音声だけを抜き取り、挿絵に合わせて動画を作成した。

一通りちいちゃんの学習が終わった後、その女優のことを紹介し、作成した動画を一クラスめに見せたのだが、そこで意外な反応があった。

子ども…先生、途中なんやけど、〇〇さん（女優の名）が読んでいるの（動画）は無いんですか？

教員…あ、あるよ。あるけど、そっちを見たいの？

子ども（たくさん）…うん、そっちがいい。見てみたい。

一通りちいちゃんのかげおくりを学習したわけだから、挿絵を中心に朗読を聞くよりも、一味変わった物語の味わい方を求めるというものが子どもたちにあったのかなとも受け取れた。

しかし、動画を切り替えてその女優が朗読しているようすを子どもたちに見せたとき、そうじゃないことに気がついた。朗読が始まったとたん、子どもたちの目はお話を読むその女優の姿にくぎ付けになった。話す仕草や朗読の緩急もさることながら、その女優の姿からにじみ出る「戦争」への怒りであったり、ちいちゃんの最期を表現する読みや動作であったり…言葉では表せないものが画面を通して子どもたちに伝わっていた。手遊びする子もよそ見をする子もいない。そんなようすが最後までつづいた。

このことがあったので残りのクラスでも最初からオリジナルの動画を見せることにした。どのクラスも同じくその女優の朗読に魅入られたように集中し耳を傾けていた。それくらいの方

が彼女の朗読にはあったのだと思う。戦争を体験した体験者の想い。番組内で語られた二度と戦争を起こしてはならないという強い想いを後世に残したいという使命感が朗読の13分45秒に込められていたというナレーションの言葉そのものであった。

<変わりはじめた子どもたち>

やれることはすべてやろうと夢中でとりくんだ授業実践だったが、子どもたちのようすがどんどん変わっていった。それは授業での反応にとどまらなかった。

まず、読書ルームでの変化である。本校には「はだしのゲン」の1～5巻（各1冊ずつ）までが貸し出せるように置いてあるが、これまで頻繁に借りられることはなかった。しかし、クラス担任の先生から「子どもたちが競うようにはだしのゲンを借りている」という話を聞き、貸し出しの棚を見てみるとすべて貸し出し中になっていた。5つの台本板が長い期間入れ替わりでずっと並んでいたのを見て驚いたと同時に、導入のときの姿との変わり様の大きさにも驚いた。

それだけではなく、各クラスの学級文庫などに置いてある「せんそうってなんだっの？」という絵本を自慢気にわたしに見せてくる子もいた。わかりづらいのだが、写真の子は外国につながるのある子であり、母国はフィリピンになるが、それでも「戦争」というものに興味をもち、自ら本を読もうという気になったのだという。まだ日本語も十分理解しているということではないが、「戦争」についてもっと学びたいと思ったようだ。



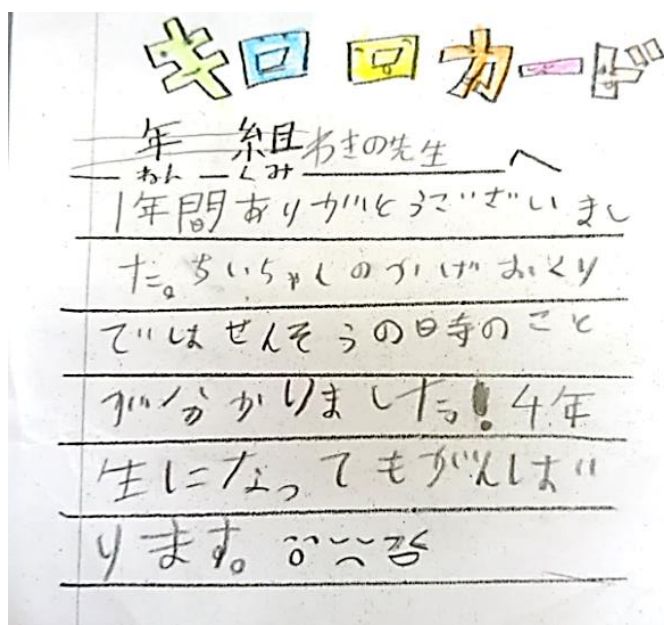
(はだしのゲンの本がすべて貸し出し中に)



(自ら本を借りて読むB)

そして、学年末の3月。出入りの授業が終わり修了式が近づいていた日に、たくさんの子が一年間の国語の授業をもったことへの感謝の手紙（キロロカードという）をくれた。

中身は国語の授業の事や指導について、国語の点数が上がった、分かりやすかったなどの内容だったが、そのなかの一枚に下のようなものがあった。



(子どもからもらったカード)

このカードを書いた子は授業中、あまり発表をすることはなかったけれど、音読には積極的にとりくんでいこうと頑張っていた。事前学習のときの感想にも、「戦争はもう二度とやってほしくないから戦争のことを勉強したいです」「なんで戦争なんてやったんだろうか？」と書いていた。

そして、ちいちゃんのかげおくりの学習も終わり4年生になるかというときに自主的にカードを書いてわたしに伝えたかったことがこれだったのかと思うと目頭が熱くなる思いがした。

<成果と課題>

この実践をとりくんで思ったことは「戦争」というものをどうやって子どもたちに伝えていくか…という点に置いて、まず戦争というもののもつ嫌悪感（怖さ？）みたいなものを子どもたちにどう乗り越えさせるかである。決して楽しいものを学ぶわけではない。大切なことだと頭では理解している、できれば学びたくないと思っている子や、早く終わらないかと思っている子もなかにはいたのかもしれない。

まして日本では（74年間）戦争をしていない現状でわざわざ戦争について学ばなくてはならないのは子どもによってはしんどいことなのだろうと思う。

また平和教育についても教員自身の思い入れや熱の入れようによって深くも浅くもなる。極端に言えば、この「ちいちゃんのかげおくり」にしても、ここまでやっても不十分と思う自分もいれば、ここまでやらなくてもいいじゃないかという人もきつといるだろう。

国語科の単元であるので、ただ物語を読み取ることに徹することもできたのだろうが、わたし自身、平和教育を実践する数少ないチャンスだと思ってとりくませてもらった。

しかし、戦争のことを知るといのは子どもにとって相当な重さを感じることであり、それを各々の子が乗り越えて自ら踏み入れることが必要なのだと感じた。

「戦争」は一言で言うと「むずかしい」と思う。楽しくも面白くもない重い事実だが、やはり実践する人間として目の前の子どもたちに戦争と平和のことは伝えていく必要があると考える。平和教育は実践していかななくてはならないと思っている。

今回の実践は地域教材を活かしたわけでもなく、戦争体験者の話を聞いたわけでもない。平時の授業のなかで、反戦への想いの詰まった教材をいかにして子どもたちに伝えるか。戦争なんて起こしちゃならない。子どもたちを戦場に送りたくない。ただそれだけで突っ走ったとりくみであり、計画的にも行き当たりばったりだった面もある。

でも、子どもたちのようすがどんどん前向きになっていく日々がとても充実していて、「戦争はあかん」って声をそろえて言える子どもたちが逞しく思えた。

今はこのくらいの事しか自分にはできないけれど、いつかきつともっと深い平和教育ができるように、子どもたちが戦争のことについて学んでよかった、平和ってほんとうに大切なんだって大人になっても思えるような実践を画策していけないな…と思った。